

中学生の喫煙、飲酒経験と薬物に対するイメージ

—薬物乱用防止教育のあり方を探る—

学校保健 河田 史宝

1. はじめに

ここ数年、覚せい剤などの薬物が関係する未成年の犯罪が急増し、「第三次覚せい剤乱用期」と呼ばれるほどの深刻な事態となっている¹⁾。文部科学省もすべての中学校と高等学校で薬物乱用防止教室を開くように要請し、平成十年12月に告示された新学習指導要領でも小学校から薬物乱用防止教育を実施することを盛り込むなど、教育的な側面からの対策に全力を挙げている。

薬物乱用は、飲酒、喫煙と関連があり、特にタバコとの関連が指摘されている。そこで、今回は喫煙・飲酒経験と薬物に対する意識を調査し、薬物乱用防止教育のあり方を探った。

2. アンケート調査

(1) 調査方法

2年生157名を対象に2001年6月1日に学級担任が各学級で質問紙を配布し、記入後回収をした。調査は無記名とした。有効回答率は96.8%であった。調査内容は、対象者の背景、喫煙および飲酒経験の有無、13項目からなる薬物に対するイメージである。分析は、SPSSを使用し、 χ^2 検定を行った。

表1 対象者の背景

		男子	女子	合計
喫煙経験	ある	6.2	3.4	9.7
	ない	45.5	44.8	90.3
飲酒経験	ある	36.6	33.1	69.7
	ない	15.2	15.2	30.3
学習経験*	ある	65.3	41.4	53.8
	ない	34.7	58.6	46.2
合 計		51.7	48.3	100.0

*: $p < 0.05$

(%)

(2) 調査対象と背景

表1に対象者とその背景を示した。対象者は、男子51.7%、女子48.3%であった。喫煙経験のあった男子は6.2%、女子は3.4%で、喫煙経験のない者の割合が高かった。飲酒経験のあった男子は36.6%、女子は33.1%で飲酒経験のない者の割合が高かった。喫煙経験よりも飲酒経験のあった者の割合が高く示された。喫煙経験、飲酒経験ともに性別において χ^2 検定の結果、有意差を認めなかった。学習経験あった者は、男子65.3%、女子41.1%で有意差を認め、男子は女子よりも学習経験をした者が多かった ($\chi^2 = 8.324$, $df = 1$, $p < 0.05$)。

(3) 性別と薬物に対するイメージ

13項目の薬物に対するイメージの内、薬物のイメージとして最も多かったのが「中毒」82.8%であった。次いで「犯罪」65.5%、「危険」63.4%、「悪いこと」60.0%が高かった。「自由」3.4%、「芸能人」11.7%のイメージは低かった(図1)。

性別と薬物に対するイメージでは、13項目中「中

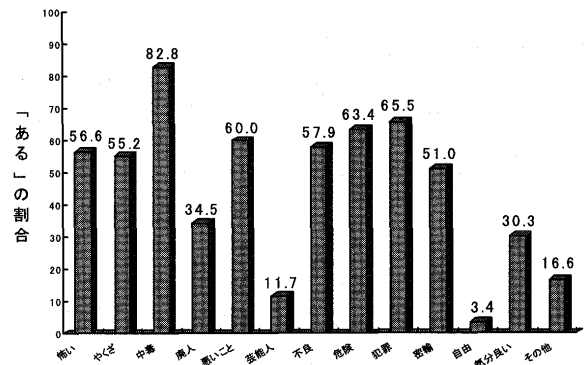


図1 「麻薬、覚せい剤、シンナー」等のイメージ

毒」「廃人」「悪い」「芸能人」「犯罪」「密輸」の7項目に有意差を認めた(図2)。

「中毒」と性別との間に有意差を認め、男子に比べて女子に中毒のイメージを持つ者が多かった($p < 0.01$)。「廃人」と性別との間に有意差を認め、男子に比べ女子に廃人のイメージを持つ者が少なかった($p < 0.05$)。「悪い」イメージと性別では、男子に比べ女子に悪いイメージを持つ者が多かった($p < 0.05$)。「芸能人」と性別の間では、女子に比べて男子に芸能人のイメージを持つ者が多かった($p < 0.01$)。「犯罪」と性別では、男子に比べ女子に犯罪のイメージを持つ者が多く示された($p < 0.05$)。「密輸」と性別においては、男子は女子に比べて密輸のイメージを持つ者が多かった($P < 0.05$)。「中毒」「悪い」「犯罪」のイメージは女子に高く、「廃人」「芸能人」「密輸」のイメージは男子に高く示された。

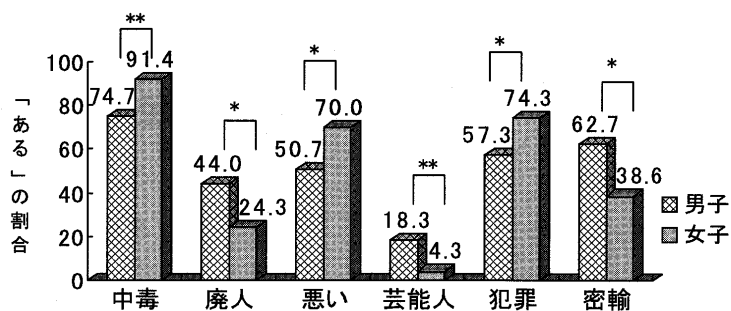


図2 性別と薬物に対するイメージ (*: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$)

(4) 喫煙、飲酒経験の有無と薬物に対するイメージ

喫煙経験の有無と薬物に対するイメージでは、13項目中「芸能人」「危険」の2項目に有意差を認めた(図3)。「芸能人」と喫煙経験の有無の間で有意差を認め、喫煙経験のある者は、喫煙経験のない者に比べて薬物から「芸能人」思い浮かべるイメージが高く示された($\chi^2 = 4.250$, $df = 1$, $p < 0.05$)。また、「危険」と喫煙経験の有無の間で有意差を認め、喫煙経験のない者は喫煙経験のある者に比べて薬物に対して「危険」イメージがあると捉えている割合が高く示された($\chi^2 = 8.128$, $df = 1$, $p < 0.01$)。飲酒経験の有無と薬物に対するイメージの間では有意差は認められなかった。

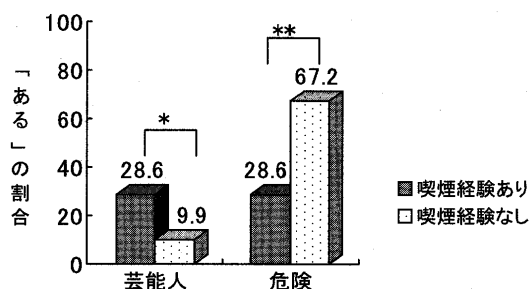


図3 喫煙経験の有無と薬物に対するイメージ (*: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$)

(5) 薬物試飲の意思と薬物に対するイメージ

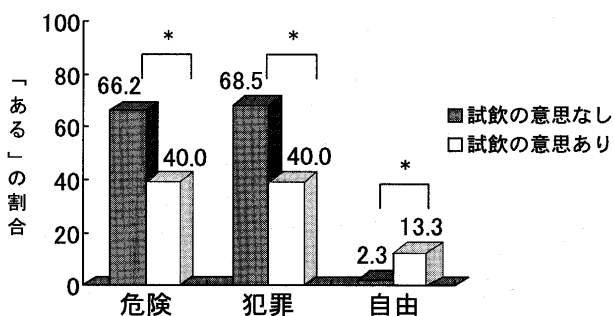


図4 薬物試飲の意思と薬物に対するイメージ (*: $p < 0.05$)

「あなたの目の前に薬物があったら、試してみたいですか」という薬物試飲の意思がある者は10.3%、薬物試飲の意志のない者は89.7%であった。性差では、薬物試飲の意思があると答えた男子は9.3%、女子は11.4%と有意差はなかった。学習経験の有無では、薬物試飲の意思があると答えた者は、学習経験のある者では11.5%、学習経験のない者では9.0%で有意差はなかった。薬物試飲の意思の有無と薬物に対するイメージでは、13項目中「危険」「犯罪」「自由」の3項目に有意差を認めた。「危険」と薬物試飲の意思の間に

有意差を認め、薬物試飲の意思のある者がいない者に比べて、危険なイメージがないとする割合が高かった ($\chi^2=3.967$, $df=1$, $p<0.05$)。「犯罪」と薬物試飲の意思の間に有意差を認め、薬物試飲の意思のある者がいない者に比べて犯罪のイメージがないとする割合が高かった ($\chi^2=4.822$, $df=1$, $p<0.05$)。「自由」と薬物試飲の意思の間に有意差を認め、薬物試飲の意思のある者はいない者に比べて自由であるというイメージが高く示された ($\chi^2=4.910$, $df=1$, $p<0.05$)。「危険」「犯罪」のイメージは、薬物試飲の意思を持たない者の割合が高く、「自由」のイメージは薬物試飲の意思を持つ者の割合が高く示された。

(6) 喫煙、飲酒経験と薬物試飲の意思の有無の比較

図5に喫煙経験と薬物試飲の意思、図6に飲酒経験と薬物試飲の意思を示した。喫煙経験と薬物試飲の意思の有無では、薬物試飲の意思があると答えた割合は喫煙経験のある者は35.7%、喫煙経験のない者は7.6%で有意差が認められた ($\chi^2=10.753$, $df=1$, $p<0.001$)。喫煙経験のある者は喫煙経験のない者に比べて薬物試飲の意思がある割合が高く示された。同様に、飲酒経験と薬物試飲の意思の有無では、薬物試飲の意思があると答えた割合は、飲酒経験のある者は14.9%、飲酒経験のない者は0.0%で、飲酒経験の有無と薬物試飲の意思の間においても有意差が認められた ($\chi^2=7.289$, $df=1$, $p<0.01$)。飲酒経験のある者は飲酒経験のない者に比べて試飲の意志がある割合が高く示された。

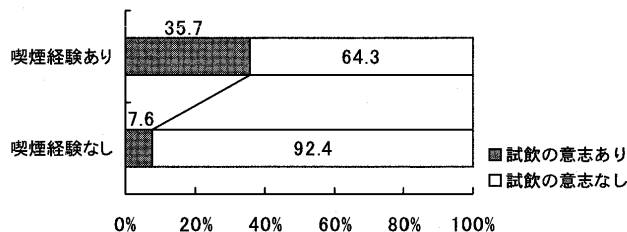


図5 喫煙経験と薬物試飲の意思の有無 ($p<0.001$)

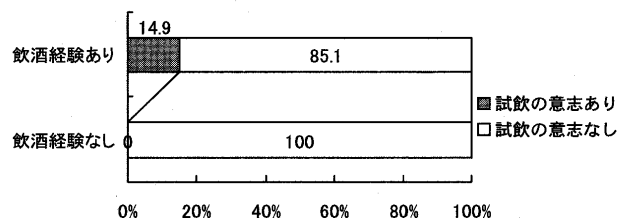


図6 飲酒経験と薬物試飲の意思の有無 ($p<0.01$)

(7) 自己意識と薬物試飲の意思

図7に自分自身に対する意識(以降自己意識とする)を示した。「好き」11.7%、「大切に思う」35.9%、「考えたことがない」40.0%、「その他」12.4%で「考えたことがない」が最も多く示された。「その他」は自由記述式で、「どちらでもない」の3名を除くと残りは全て「あまり好きではない、かなり好きではない、嫌い、大嫌い」と自己を否定する記述であった。薬物試飲の意思と自己意識の間において、薬物試飲の意思のある者もない者もいずれも考えたことがないと回答したものが最も多くいた。 χ^2 検定の結果有意差は認められなかった。自己意識と性別、喫煙経験、飲酒経験との間においても有意差は認められなかった。

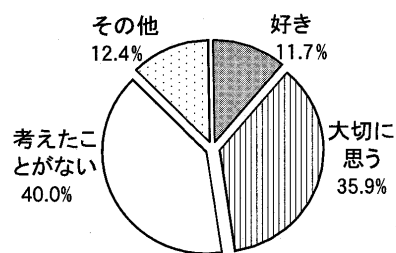


図7 自己意識

(8) 相談相手の有無と薬物試飲の意思

相談相手のいる者は63.4%、相談相手のいない者は36.6%であった。相談相手の有無と性別では、相談相手のいる男子は66.7%、女子は60.0%で、いずれも相談相手のいる割合が高かったものの有意差はなかった。図8に相談相手の有無と薬物試飲の意思の関係を示した。薬物試飲の意思があるのは、相談相手がい

ない者では17.0%，相談相手がある者では6.5%で有意差がみられ，相談相手のいない者の方が相談相手のいる者に比べて薬物試飲の意思が高かった ($\chi^2=3.967$, $df=1$, $p<0.05$)。

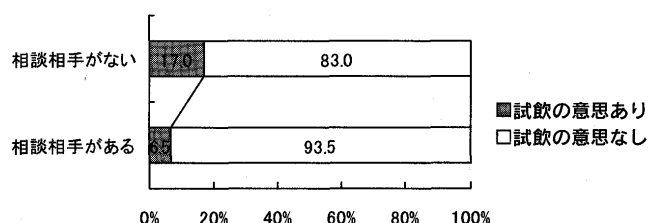


図8 相談相手の有無と薬物試飲の意思 ($p<0.05$)

(9) 自己意識と相談相手の有無

図9に自己意識と相談相手の有無の関係を示した。自分を「好き」と答えた者は相談相手のいる者では14.1%，相談相手のいない者では7.5%であった。自分を「大切に」と答えた者は，相談相手のいる者では42.4%，相談相手のいない者では24.5%であった。相談相手のいる者の方が自分自身を「好き」あるいは「大切に」と捉えた割合が高かった。「考えたことがない」と答えた者は，相談相手のいる者は37.0%，相談相手のいない者は45.3%であった。自己を否定する記述のある「その他」は，相談相手のいる者は6.5%，相談相手のいない者は22.6%であった。「考えたことがない」「その他」では相談相手のいない者の方が割合が高く示された。相談相手の有無と自己意識との間において有意差を認め，相談相手のいる者はいない者に比べ自分を好きあるいは大切に思う気持ちが有意に高く，相談相手のいる者はいない者に比べ「考えたことがない」割合が有意に低く示された ($\chi^2=11.857$, $df=3$, $p<0.01$)。

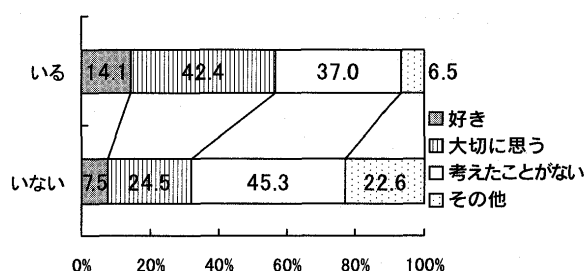


図9 相談相手の有無と自己意識 ($p<0.01$)

3. 考察

ファッション感覚で薬物に興味を持つ可能性があるのが，今日の薬物流行の特徴といわれる。使用方法も簡便化し，注射痕が残らないカラフルな色の錠剤になっている。また，エス，スピード，エル等薬物の名称自体もファッション化し³⁾，これらの変化は違法薬物のイメージを変えているともいえる。今回の調査においても，薬物のイメージとして「中毒」は8割を超えているが，「怖い」「悪いこと」「危険」「犯罪」に対するイメージは6割にとどまり，薬物に対する意識が低下し許容が高くなっているととらえることができる。女子では，薬物は悪いことで犯罪に結びつき，使用すると中毒になるととらえられているものの，男子ではこれらに対するイメージは低いものであり，性別によってとらえ方に差があることも示された (図2)。

生徒の実態は，喫煙経験よりも飲酒経験の割合が69.7%と高く示された。飲酒経験者の多いことは，アルコールやタバコは合法薬物であり，Drugではないとする考え方が，社会の背景にあることが考えられ⁴⁾，日本はアルコールに甘い社会背景の表れともいえる。薬物連鎖の最初に位置するのがワインやビールなどのアルコールで，次にタバコに進むともいわれ，タバコやアルコールはゲートウェイ・ドラッグ^{4,5)}といわれている。今回の調査においても喫煙経験のある者は，薬物に対する危険イメージが低く示された (図3)。このことは，喫煙経験者の薬物に対する許容が高いことが考えられた。また，薬物試飲の意思のある者は，危険や犯罪イメージも低く，自由のイメージが高く示され (図4)，薬物に対する許容が高いといえる。さ

らに、喫煙経験者、薬物試飲の意思がある者が多くいることは、喫煙経験者の薬物に対する危険意識が低いとも考えられた。

相談相手のいる者は相談相手のいない者に比べて薬物試飲の意識がないとする者が多く示された(図8)。相談相手のいる者は自分自身を好きあるいは大切ととらえていた。一方、相談相手のいない者は、薬物試飲の意思のある者が多く、自分自身のことを考えたことがなく、自分のことが嫌いな者が多かった。セルフエスティームの低く周囲に肯定されてない子どもが薬物にかかわっていく傾向があることが考えられ^{6,7)}その一面を示すものといえる。

タバコやアルコールがゲートウェイ・ドラッグであることを考えると、学校での指導は、喫煙、飲酒薬物を関連付けた指導が必要である。また、低年齢化の背景にあるものには、核家族化、少子化が進み世代間の規範意識を継承する機会が低下し、悪い誘惑に対する子どもたちの抵抗力が低下したことも指摘されている。喫煙・飲酒も含めた、薬物に対する誘惑は常に仲間からもあることを考慮すると、薬物の危険性に対する知識のみを教えるのではなく、スキルを育てることも重要である。さらに必要なのは、自己肯定観といえる。自分を肯定し、社会や家庭からも肯定される確かな自分や在り方を見出しているならば、さびしさ、不安、葛藤といった否定的な感情で逸脱行為に移行することが少なくなると考えられる。さらに、困ったときにきちんと生徒と向き合って相談にのれる大人の存在も不可欠といえる。

※ アンケート調査用紙作成にあたっては、本校学校薬剤師手取屋瑞子氏、薬剤師島田静子氏に協力いただきました。

参考文献

- 1) 和田清, 薬物乱用・依存の疫学, 保健の科学第43巻第2号 p108-112, 2001
- 2) 庄司正実, 若年少年の薬物乱用, 保健の科学第43巻第2号 p102-106, 2001
- 3) 三澤馨, 薬物乱用—世界の趨勢, 保健の科学第43巻第2号 p126-129, 2001
- 4) 和田清, “Gateway Drug” 概念について, Alcohol & Drug Dependence 34(2), 95-106, 2000
- 5) 田所作太郎, 麻薬と覚せい剤, 星和書店, 1998
- 6) 小森榮, 薬物乱用の現状と教育に望むこと, 学校保健のひろば, No.22, p24-27, 2001
- 7) 子どもと教育・文化を守る埼玉県民会議 [編], 親と教師のための覚せい剤問題入門, 合同出版, 1997
- 8) 長野健一, 薬物乱用の現状と教育に望むこと—取締官の立場から—学校保健のひろば, No.22, p20-23, 2001